

「評価」

解説／草信和世

(大学教員)

いにしへの「評価」に思いを巡らせたところ、その原点は実践後の振り返りの時ではないかと気付きました。今回はその時を取り上げた、「子どもが帰った後」(一九三三年)、「幼児の帰った後のしじま」(一九五二年)の二編をまずご紹介したいと思います。どちらも倉橋惣三によるものです。

最初に「子どもが帰った後」についてです。この一編は、『育ての心』^註に掲載されており、ご存じの方もしらっしゃるのではないでしょうか。ここで彼は、保育者が自分の保育を振り返り、「評価」する姿を描き出します。ねらいを持って教育活動を行い、その達成について常に「評価」・反省を加えていく教師の姿を彷彿^{ほうふつ}とさせ、現代の「評価」に通じるも

のが感じられます。

子どもが帰った後

倉橋惣三

(一九三三(昭和八)年 第三十三巻第七号)

子どもが帰った後、その日の保育が済んで、まずほっとするのはひと時。大切なのはそれからである。子どもといっしょにいる間は、自分のしていることを反省したり、考えたりする暇はない。子どもの中に入り込み切って、心に一寸の隙間も残らない。たゞ一心不乱。

子どもが帰った後で、朝からのいろ／＼のことが思いかえされる。われながら、はっと顔の赤くなることもある。しまったと急に汗の流れ出ることもある。あゝ済まないことをしたと、その子の顔が見えて来ることもある。——一体保育は……。一体私は……。

とまで思い込ませられることも常である。大切なのは此の時である。此の反省を重ねている人だけが、真の保育者になれる。翌日は一歩進んだ保育者として、再び子どもの方へ入り込んで行けるから。子どもが帰った後で、此の反省をしない人。疲れて、ほっとして、けろりとして、又疲れて、ほっとして、けろりとして、同じ日を重ねるだけの人。その日ぐらしの人に進歩はない。

夏やすみにも、此の同じ意味の大切さがある。

次に「幼児の帰った後のしじま」についてです。彼はここで、「保育が幼児のために何を残すかは、

素より大切なことである。がまた、保育が日々にわれらに何を残すかも貴重なことである」と述べて、保育が自分に残すものを「保育の味」として味わう保育者を描き出します。そのひとときから力を得て、一年二年と保育を続ける保育者を思い起こさせるとともに、その味は、保育そのものから頂く貴い賜物であり、これなしでは保育に「没入」することができない要となるものではないかと思われまします。

現代において、総合的に目に見える成果を求めることが困難な保育を「評価」することの難しさは依然としてあると考えられます。そのような現代に、「保育の味」は何かを示すのではないのでしょうか。

幼児の帰った後のしじま

倉橋惣三

(一九五二(昭和二十七年)年 第五十一巻第七号)

保育は幼児の帰ると共に終る。しかし、先生にと

って大切なのは、その後である。いゝ、ま、なんて、氣どった時間がある訳ではないか、おかえり、さようなら、の後はしばらく、小半ときか、そのどや／＼のおさまった一とき、あたりがいんとする時がある。先生のほっと息をするときであり、ひとりで椅子にからだを投げるときであり、だまって目を閉じるときであり、ぼんやり窓から外を見るときであり、なんとすることもなく庭へ出てぼつねんと木の下に立つときでもある。なにも一々さういうしぐさをするときという訳ではないが、動きづめのからだに、ちよっと憩いが与えられ、子供を見るにのみ忙しかつた目が内に向き、子供を追っていた心が自分というものに帰る時間である。

それが余り長くなると、眠りに落ちて仕舞うこともあるがまどろむでもなく、沉んやぐっすりでもなく、うつとりと、保育の酔いを味う瞬間といおうか。快いというも強すぎる。楽しいというも興じすぎることが。

保育の味は元来が淡いものである。中に甘味も苦

味も含まれていながら、そのあとあじの淡さは、よい茶の服後に似るべきものである。茶の味は飲んでいる間よりも、残る後味にある。一滴の玉露でも、大ふくの濃茶でも、味わうともなきおのずからな後味が貴い。それを、あわたゞしく座を立てては惜しい。

保育も、といって、素より、その香味の質もその味わい方も一つではないが、子供たちの帰った後の一ときの貴さという点に変わりはない。そうして、その後味を粗末にする人とは共に保育を語りあえないといつてよからう。

保育が幼児のために何を残すかは、素より大切なことである。がまた、保育が日々にわれらに何を残すかも貴重なことである。朝に保育の目的と企画があり、昼に保育の過程と実際があり、その過程と実際に、幼児と一つに我れを忘れる没頭があり、かくて、保育のために働くわれらの日々が過ぎてゆくのであるけれども、われらは、その、たゞに過ぎゆく

ことだけでいいものだろうか。残すものは、たゞ幼児への業績だけであっていいものだろうか。保育三年、われに何が残るのだろうか。保育五年、われに残るものは何んであるうか。而して、保育十年、たゞその業績の記録が残るだけでいいだろうか。その業績も、小さいものでは決してないが、必ずしも著しいものではなく、とり立て、大に酬いられるものでもない。少くも、あまり大きく酬いられようと思つたら、恐らく失望させられることも多いであらう。根を培うものは必ずしも思い通りの大輪を期待し難く、希望通りの果実を収穫し得ないかも知れないからである。少くも一日々々の保育の業績を重ねてわれひと、目をみはることはできないであらう。残るものは、日々に味う保育の香の、忘れ難い思い出である。後に残るとも知らなく、人に告げようもなく、その日その日に快よい酔い心地こそである。

快よい酔い心地というけれども、その快さの中には、疲れもあり、苦勞もあり、一人々々の子供に済

まなかつたと思う悔恨もないではない。うつとりとした、まの中に、浮び出てくるものは、幼児のあの笑顔であると共にあの泣き顔である。馳けぬけて得意な顔であると共に、すべりころんで泣面つくる顔である。寄り添うてくるまるい肩と共に、時には不機嫌に淋しい背を見せて馳けて去る後ろ姿がある。今頃はあの町を、足踏み鳴らして帰ってゆくと思ふ子を追いかけて、後ろからその肩に手をかけたくなることもある。今頃はあの畔道を、とぼ／＼とひとりゆくと思ふ子に追いついて、さっきの不愛想を詫びたくなることもある。なぜそんな歌い方をするのと叱つておいて、すぐそのあとから自分でも歌いそこなつた失敗を、ひとりで可笑しくなることもあり、やめない泥いたずらをやめさせようとして、却つて子供のエプロンを泥だらけにした不手際に、ひとりできまり悪く思ひ出すこともある。こまかくは、あのときの返事の気のなさ、答え方のまずさ、子供とした約束を、うっかり忘れていたこと、子供の喧嘩に気短かな仲なおりをさせたこと、あれやこれや、

人知れず頬をあかめることもある。しかも、それらがどれも、これもひきくるめて、ほんのりと保育の香を味わせてくれるのである。敢て、保育の反省といわない。保育の経験ともいわない。初夏の風かおる午後そういう貴いしぐまが、先生方によくあるのである。

このしぐまから、ふとわれに帰って、保育室のあとかたづけが始まる。あすの保育の準備が始まる。——帰りを急ぐ先生や、すっかりぐったりしている先生や、お稽古ごとや、アルバイトに気をとられ勝ちの先生達には、保育が忙しい仕事としてあるだけだったり、往々にして片手間仕事として行われるだけだったりする。——あじけない一日々々ではある。

最後にもう一編、上記の二編の間に発表された、「保育の味」(一九四七年)をご紹介します。日本的性格を持ち翻訳不可能と言われる倉橋の言葉から、日本の保育を味わうひとときを今少し過ごしていたければ幸いです。

保育の味

倉橋惣三

(一九四七(昭和二十二年) 第四十六巻第五号)

保育の必要は誰れでもいう。保育の目的はきまつている。保育の原理と方法は研究者が考える。たゞ保育の味だけは、幼児保育の日々の実際家のほかに分らない。

教育は人と人とのふれあいなしに出来ない。保育は殊に、懇な、こま／＼しいふれあいである。保育の味は、そのふれあいにのみ味われる。保育の実際はむつかしくもあり骨もおれる。決してらくな仕事でもなく、或る意味に於ては苦勞の連続である。しかもその苦勞の間に、しみ／＼とした味わいがある。保育の味は必ずしも甘いと限らない。苦くもなく辛くもないが、よそからおもうように甘ったるいものではない。しかし、一旦味ったものには忘れられない味である。保育實際家はその忘れられない味、

味わわずにいられないみりよくに引きつけられて、毎日毎日の保育をする。

この味をぬいて、保育は、必要論と目的論と原理論と方法論との殻になる。ことによったら、味のなにかすに止まるかも知れない。そんなことで、保育実家は、ほんとうに保育に没入し得るものでない。

この味は自分で味わ、なくては分らない。多分相当の年月を重ねなくては分らない。更に、恐らく保育というよりも幼児に苦勞しなければ分るまい。たゞし、年月を重ねている中に味のぬけることもあろうし、苦勞している間に味のすりへらされることもないといえない。

味は人にもいえぬ。人知れぬ楽しさである。この味を楽しむゆえに、保育実家は自ら自分を幸福とする。人に認められなくとも報いられなくともその幸福に生きる。

終りに念のためつけ加える。味々といつて幼児をなめるのではない。なめてかゝってはならないし、なめ可愛がりなどをしてはならない。楽しさといっ

て、世の常の浮いた楽しさでないことはもとよりである。保育実家同志は、この味、互にだけ分るこの味がいつも話しの中心になる。そしていつでも互の幸福を語りあつては別れる。

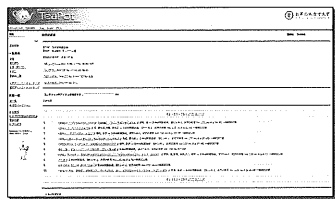
*旧字体は新字体に、歴史的仮名遣いは一部現代仮名遣いに改めました。――編集部――

注 倉橋惣三『育ての心』フレール館 二〇〇八年

幼児の教育 バックナンバーを WEBページで公開中

「幼児の教育 TeaPot」で

検索



<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/52377>

明治34年発行の創刊号から、現在、平成23年発行の第110巻第4号までご覧になれます。